

幸田露伴著「渋沢栄一伝」岩波文庫、岩波書店 2020年11月13日刊を読む

渋沢栄一、パリへ

1. 1866年(慶応2年)11月29日に、原市之進から談ずべきことがあるから来て呉れという使があった。直に往いてその談を聞くと、今度西紀1867年即ち明年を以て仏国巴里に仏国政府の企くわだてによって万国大博覧会が催され、世界各国の文明の事実が蒐集され展開され評論されるのである。
2. この事は仏国公使レオン・ロッシュより本年6月を以て幕府に告げ、その参加を促うながしており、幕府に対して特に好意を寄せ呉るるロッシュの親切なる意見に、この機会を利用して日本大君の連枝を同地に派遣し、国交の親善を図ることが宜しかろうとの事である、上様に置かせられても道理と聞召きこしめされ、清永殿(水戸家齊昭第18男、今年12月9日清水家を相続したる徳川昭武、時に年15)を差遣さしつかわされ、仏国及び欧羅巴諸国を訪問し、交誼を厚くし、しかる後仏国に留学せしめらるることに定まった。
3. しかるに公子外国行に就きては、水戸藩士の間には理解無くして反対する者も多かったが、異議ようやく収まりて事決したれば、御随行の者7名を命ぜられた。
4. ただしその人々は忠義にはあれど頑固にして、今なお外人を夷狄とのみ賤み居るようのものであれば、攘夷論を立てていた者ではあるが物の理解の宜しい篤太夫を差加えたら、彼等とも折おり合あ宜敷よろしき敷上しきに、片寄り過ぎるような偏屈の弊をもなごめ得て調停の役に立つであろう。
5. 特に見込有る有為の材なれば彼の行末の為にも遊学さするが宜しかろう、との上様の思召おもしめしである。
6. 丁度庶務会計の任に当るべき者も無くては叶わざること故、足下その任に当って御伴申すようにとの事であった。
7. 吉田寅次郎などが一身を賭けても渡航して観察したいと願った外国へ、徳川將軍の連枝たる民部公子の従者として、十分に便宜多き資格を以て各国に臨み、世界の何様どうようという様子であるかを知ることが出来る活学問の途に上り得るのである。
8. 栄一は忽然として好運に接したのである。
9. 今の今までは不平不満で鬱悒うつゆうに囚とらわれていたのであるが、主公の眼は我が頭上に光っていたのである。
10. 栄一は知己の感と機運の恵とに何で喜ばずに居られよう。
11. 直ちに領承の旨を答えて退しりぞいたが、実にこの民部公子随行の命こそは、天よりの寵命であって、今までは人生行路の転湾抹角を経て来たのだが、ここに至って経済に心を致した時からの細い道を横に折れること無くして、而して万里一条の大道路に出るようになり、終に新しい日本の文明の先進者指導者となって、百花怒発し万木競榮するの天地を現出するの産婆役を務め、国の為にし民の為にするの初志を成すを得るに至ったのである。

P114 ~ 115

<コメント>

將軍徳川慶喜により、パリ万博への随行を命じられた渋沢栄一の心情がよくわかる幸田露伴著「渋沢栄一伝」。